

聖書を「読む」には教理や歴史も結構だが、イマジネーションは存分に膨らませたい。難しい話ではない。落語を聞いた後、「あっしのことですかい」なんて言葉を使っちゃうくらいの感応力で充分。

クリスマスの頃は夜が一番深い。世がもっとも暗い時に、もっとも貧しい場所で(ルカ 2:16)、救い主がお生まれになった(2:11)。そしてその奇跡は、もっとも慎ましい人たち(2:8)によって見出された。

暗さに目が慣れたら地理的な広さにも注目したい。その頃、地中海全域のローマ帝国で住民登録が行われていた(2:1)。人頭税を漏れなく徴収するための住民登録。民を圧迫する住民登録という「夜」は冬至の漆黒に重ねられていっそう暗い。ただ帝国支持者には「皇帝の光と平和」の徹底であろうが。

夜の深さ、夜の広さを思い描いてから、ほんの小さな降誕の光を見つめよう。真夜中、羊飼いらが数多の家畜小屋から、救い主をどうやって見つけ出したかは分からない。天使は去っているので(2:15)、聖霊に導かれたか。「そして急いで行って、マリアとヨセフ、また飼い葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てた(2:16)」。

ヨセフは町場の職人で、羊飼いは風体も大分違う。明かりのない狭い家畜小屋で、町場の庶民と典型的な牧童がどんなやり取りをしたのだろう。記述がないので想像するばかりだ。

「その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた(2:8)」。

妙にイメージが喚起される光景。

僅かに草生えた原野、乾燥した糞がチロチロ燃えるあたりに上着を被ってうずくまる影が三つ四つ。傍らには体を寄せ合って眠る羊の群がひと塊。冷たい風が小さな焰を揺らし、周囲には茫漠とした闇が広がっている。あっ、と直感した。降誕の奇跡そのものの光景ではないか。

羊飼いらは天使から「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる(2:10)」と言われ、ただちに夜の野を走り続けて「飼い葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てた(2:16)」。

そしてそれら一連の出来事を人々に知らせた(2:17)。

ところが「聞いた者は皆、羊飼いたちの話を不思議に思った(2:18)」。「不思議(驚く)」とは否定的な意味あい、バカバカしい、嘘つきの牧童の作り話、みたいなニュアンスだ。

救い主の降誕(2:11)が多くの人に伝えられても、世は茫漠とした闇の内にある。

「しかし、マリアはこれらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた(2:19)」。

あたかも暗く冷たい夜の原野で、チロチロ燃える乾燥糞の焰ではないか。

「心に納めて思い巡らせる」。ただちに恵みへの感謝ではないし、悔い改めや劇的な展開もない。天地がひっくり返る大事件が、静かに、己に染み込んで来る「感じ」を味わっているマリアの柔らかな黙想。これを私たちの伝道の手本にしたい。

野火の燃え広がり方ではなく、燭火礼拝のごとく、淡々と、降誕の焰を静かに手渡しするような。

「光を造り、闇を創造し、平和をもたらし、災いを創造する者。わたしが主、これらのことをするものである(イザヤ 45:7)。災いはやめてほしいが、やがて創造主を「日の昇るところから日の沈むところまで、人々は知るようになる(45:6)」。

主の「賭け」である降誕の業を、私たちは「心に納めて思い巡らせ」この生がいっそう深いものになる。夜の深さに灯る降誕の焰を、暗さに慄く人に手渡したい。



《おまけのひとこと》

降誕の微かな光が世界の広大な闇と均衡している 闇の深度に応じて焰は輝く 私たちは自らの暗い原野を歓迎する 遠方の小さな光源をも感じられるから 足許を確かめつつ 一歩ずつ焰の方へ